

# 学際的ワークショップ 『精神分析の知のリンクにむけて』

## —第六回「女性性・男性性」—

精神分析理論の根底には、性差の問題があります。フロイトは初期には、人間は両性的な存在であり、両性性についての理論こそが、精神分析が到達すべき最終的な理論になるだろうと確信していました。しかし、彼は分析臨床において、エディプスコンプレクスを中心に置くことにより、男性中心的な理論を構築します。フロイトが女性性の謎の解明に取りかかったのは、晩年になってからのことです。フロイト以降に、この謎を最もラディカルな形で理論化したのは、後期のラカンです。彼は男性の享楽と女性の享楽が、異なった論理に従っているために、両者の間に「関係はない」と断言しています。このようなラカンの女性性に関する理論は、現代思想のなかでは広く受容されていますが、彼の理論も、異性愛主義に汚染されていないでしょうか。また、ラカンは女性というカテゴリーの異種混濁性を強調しますが、もう一方の男性というカテゴリーは、果たして彼が考えるようにシンプルなものでしょうか。性差の二分法、およびそこから派生する「男性らしさ」「女性らしさ」という属性は、現在においても、私たちの思考のみならず、ライフスタイルを攪乱させる問いであり続けています。今回のワークショップでは、女性性、男性性という問いを臨臨床的、および文化社会的な観点から論じることになります。

今回のワークショップでは、発表者として、『文化と暴力』『ディズニーと動物』などの著作があり、バトラーの優れた翻訳者でもある清水知子氏、昨年『女性は不死である』という書物で、ラカンの女性論を論じた立木康介氏、イギリス文学の研究者であり、雑誌『群像』に興味深い「両性性論」を連載中の小川公代氏をお迎えします。討論は、思想史（精神分析史）研究者の佐藤朋子氏、精神分析的な精神療法家の鈴木菜実子氏が行います。司会は、当ワークショップのコーディネータの一人である藤山直樹、ならびに企画者である十川幸司が担当します。

日 時：10月3日（日）13：00～17：00

場 所：TKP 市ヶ谷カンファレンスセンター

方 法：ハイブリッド形式（コロナ感染状況によって変更あり）

参加対象：精神分析に関心をもつ方なら、どなたでも参加できます。

発 表 者：清水知子（筑波大学）

：立木康介（京都大学）

：小川公代（上智大学）

討 論 者：佐藤朋子（金沢大学）

：鈴木菜実子（駒澤大学）

司 会：藤山直樹（個人開業）、十川幸司（個人開業）

参 加 費：3000 円

定 員：150 名

申し込み方法：2021年9月24日（金）までに小寺記念精神分析研究財団事務局に e-mail

でお申し込み下さい ([kodera.kt@nifty.com](mailto:kodera.kt@nifty.com))。表題は「学際的ワークショップ申し込み」とし、メール本文に、氏名、住所、ご所属とご身分（学生、 教員、会社員など）お書き下さい。返信メールにて、お振込みのご案内をさせていただきます。

主催 小寺記念精神分析研究財団